新しい 授業 づくりの文化を創る

令和4年５月 「能力ベイスの授業づくり実践講座」

第２号

「学びが大きかった」受講者の声、続々！

令和4年5月23日（月）、吹田市立豊津第一小学校において、能力ベイスの授業づくり講座のＡセット教材研究会が行われました。「学習指導要領の趣旨理解」「言葉による見方・考え方を磨く、鍛える」「子供の有能さを引き出す」等、授業者の山埜先生の提案を通し、受講者が一体となって考え、学び合った声を一部紹介します。

経験のある先生方、熱心な先生方と一緒に学ぶことができて、とても刺激になりました（K 先生）

“WHY” “WHAT” “HOW”の観点それぞれで、国語科の教科そのものについて、深い学びがありました（Y 先生）

１つの授業モデルから学ぶことが理解を深めてくれていたように思います。今回は6年生の授業をベイスに説明されていたので、低学年ではどのように迫っていくのかというところにすごく興味が湧きました（H 先生）

「読む」ことについて、なぜ読む活動をするのか、そこまでをこれまで考える機会がなかったです。単元のゴール、言語活動を設定する時点でそこまで考えておかないといけないと思いました（N 先生）

小学校国語という校種も教科も違う中でしたが、話し合いを通して、中学校数学にも通じるものがあり、特に根拠を持って学習していくというところが納得感が強かったです（S 先生）

授業者の熱い思いが伝わる教材研究会で非常に勉強になりました。他教科の授業をどのように観察し、学びに生かすか講義をうけるまではまったくイメージが湧きませんでしたが、今回の講義から共通する部分もたくさんあるなと感じました。指導要領を再度読み返し、自己の学びに活かしたいと思います（オンデマンド受講　U 先生）

なぜ、「読む」学習をするのか？

授業者より
趣旨提案
模擬授業

講師と
授業者の
対話による
論点整理

授業者	山埜 善昭 教諭	学年	第６学年
学校	吹田市立豊津第一小学校	教材	国語科『帰り道』（光村図書 6年）
身につけたい力	複数の叙述を結びつけながら人物像と人物の心情の変化、全体像を具体的に想像する力		

【授業者からの提案】

『物語の変容を捉えて、ラストシーンを三人称でリライトしよう』という学習課題を設定した。これにより、人物像や人物の心情とその変化について読み取ったことを活用できる。また、「行こっか。」「うん。」は律と周也どちらの会話としても成立するので、リライトと共有を通して、互いの意見の違いや面白さを実感させ、国語の資質・能力を身につけたい。

①「なぜ、読むという領域を学習するのか」（WHY?）

②「単元のゴールとして「リライトする」言語活動が設定されている。その設定の仕方や単元でどういった学びを描けばよいかについて」（HOW?）

【論点整理】

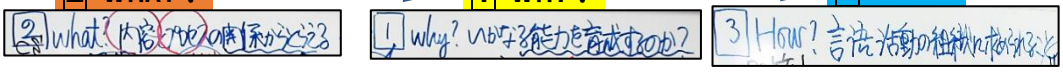
能力ベイス授業づくり実践講座における３つの視点①WHY②WHAT③HOW に基づき、授業者と講師の対話から、グループ協議の視点をつくります。協議ではこの視点だけで話し合い、実際の授業もこの視点で参観することになります。教材研究会と授業研究会をセットで実施する本講座ならではの重要なポイントです。

齊藤先生からの
全体指導

“WHY” “WHAT” “HOW” 3つの視点から単元を描く

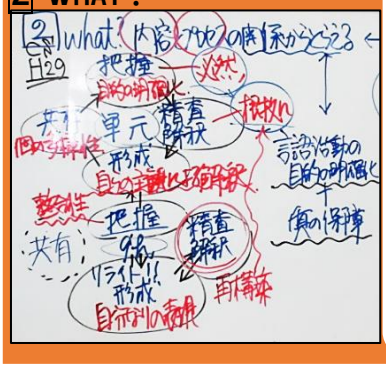
齊藤先生の
指導板書より

2 WHAT？ → 1 WHY？ → 3 HOW？



WHAT の視点

2 WHAT？



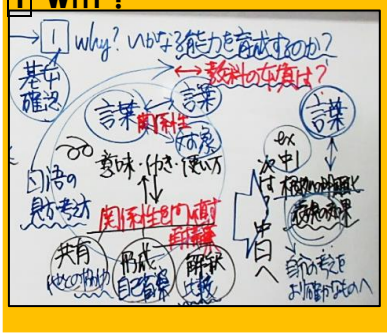
□国語で何を学ぶの？　何を学習の対象としているの？

内容（学びの成果）だけでなく、プロセス（学びの過程）も学習の対象。どちらも子供が身につけるべき資質・能力。今回の学習指導要領では、プロセスを明確に位置付けたことで、教えるべき内容との関連性をはっきりさせた。これが重要なこと。

今回の**「読むこと」のプロセスは、把握→精査・解釈→形成→共有→…**（左写真参照）。これらは単なる手続きではなく、それ自体が「能力」であり、国語科では言語活動を通じて育成してくもの。そしてこのプロセスは**単元**（写真上段）**という単位において行われるものであると同時に、本時**（写真下段）**の中でも見られる**。ここで特に大切なことは、「把握」の部分で、何のために言語活動を行うのかという「必然性」「目的の明確化」。

WHY の視点

1 WHY？



□なぜ国語を学ぶの？国語でどんな能力を育成するの？基本の確認

国語で育成する能力を考えることは、**教科の本質**を考えること。

国語は**「言葉」**を扱う教科。子供たちが、**対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方**に着目して捉えたり、問い直して**再構築**したりできることが大切。これが**国語の見方・考え方**。言葉を使いこなせるようになるためにも「読むこと」は必要。読むために読むわけではない。つまり、日常生活の中で、無自覚的に使って行っている**「言葉の営み」を、子供たちが自覚的に国語の文化として学ぶこと**が、学習指導要領の示す**国語の本質。 山埜実践では、「共有」「形成」「解釈」で言葉の再構築が行われる**と思うが、根拠の明確化、表現の効果が重要視される中学校国語へのつながりを考え、**叙述（言葉）にこだわる**ことを大切にしてもらいたい。

HOW の視点

3 HOW？

言語活動の選択（比較読みの結果として）
①三人称でリライト
②律から周也への手紙を書く
③サブタイトルを考える
④作者の立場から書評を書く
⑤感想文を書く

□どのように学ぶの？言語活動を組み立てるにあたって求められることは？

「令和の日本型学校教育」で一体的な充実が求められている「個別最適な学び」と「協働的な学び」の**主語は「子供」**、学習指導要領で求められている主体的・対話的で深い学びも**主語は「子供」**。**個別最適な学びは、「子供の個性の尊重」**であり、**協働的な学びは、「個別を支える」**もの。

この視点から全員がリライトするのではなく、**「言語活動の選択」**という方法を取り入れてはどうか。それにより、協働的な学びである**共有場面**では、互いのゴールの違いから自分では気づかなかった側面に気付き、互いの良さを認め合う中で**質的な向上**が期待できる。それにより、**子供の有能さを引き出し、それを生かす**能力ベイスの学びとなるのではないか。

編集後記　「能力ベイス」と聞くと、新しい授業なの？!と思われる先生方もおられるではないでしょうか。「学習指導要領に基づき、子供の有能さを引き出す」ことを大切にする点は、何も新しいことではなく、本来の授業の創り方に立ち戻ることを確認できる講座でした。ただ、学習指導要領をきちんと読み解く、言うのは簡単ですが、なかなか難しいですよね…。私は分からい言葉や文脈に出会ったときは、具体的な子供の姿と往還させながら読み解くことを大切にしています。そして、近くにいる同僚と共有して言語化します。それでも、読み解くまでの道のりはまだまだ長いです…。（教育センター：小林）

講座参加者随時募集中！

本講座は、随時参加登録できる研修となります。校種やキャリア、教科は関係ありません。「是非、学びたい」「ちょっと聞きたいことがある」という先生は、管理職の先生にその旨を伝え、教育センターへご連絡ください。先生方の日々の努力を、目の前の子供たちの魅力につなげましょう。